メビウス∞レポート

特定非営利活動法人メビウス千葉 活動報告 After Summer 号 2018 年 11 月 00 日発行

メビウス千葉会員の皆さま、こんにちは。日頃より私たちの活動に対するご理解、サポート、見守り、その他暖かいご支援をお寄せいただき、誠にありがとうございます。

さてこの度、従来の会報に加えまして年間４回の季節発行を目指した「メビウス・レポート」を新たに発信させていただく運びとなりました。紙面では従来の活動報告や動静に加え、私たちの新たな取り組みやこれからの活動意向、寮生からの個別の情報発信などを盛り込んで、会員の皆さまに私たちの「声」をお届けするツールとして活用させていただきたいと考えております。

どうか今後も変わらぬご支援、ご指導を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

この夏は大きな事件から始まってしまいました。

今年も大変な猛暑となった夏のはじまり６月、入寮者のひとりが飲酒、規制薬物摂取の上、自殺を試みるという未遂事件が発生してしまいました。

事件が発覚するまで、残念なことに寮生活の中でそういった兆候に誰も気付くことが出来ませんでした。施設長をはじめ、寮生の誰もが悔やんでいるところですが、彼の生活に表立った変化は無く、おそらくは本人にしか到底分からぬ悩みや、もって行き場のない思いがあってのことだと推測せざるを得ません。

幸いにも彼は一命を取りとめ、容体もすっかりと安定に向かい、リハビリを目的とした転院も済ませると、現在では日常生活への復帰を目指して訓練に励んでいるようです。しかし、そんな彼の心中にまで思いを傾けると掛ける言葉も見当たらないという現実もあります。

とにかく今は一日も早い回復を願い、また以前のように笑い合える時が来ることを、仲間一同、待ち望んでいます。

メビウスでは生活の大部分が本人に任せられます。一日の大半を自分で考えて行動できる反面、その結果についてもすべて本人に責任があるということを受け入れなくてはなりません。そういった一般の社会では当たり前である道理を、少し立ち止まって改めて考え直してみる。そんな些細なところからこれからの生活の全てを建て直してゆくのがメビウスでの時間だと言えるかもしれません。

私たちメビウスの寮生たちは皆、「当たり前」だとか「常識的には」といった考えが、時に、自身が抱え込んでしまった望まぬ欲求や行動のせいで、当たり前に出来なくなってしまうことがあるということを身をもって知っています。そんな仲間同士だからこそ打ち明けられる悩みもあるはずです。また逆に、そんな仲間同士だからこそ面と向かって言うことができない胸の内もあるのかもしれません。

それでも私たちは前を向いて進んで行きます。

皆がみな、手を取り合って一歩ずつ同じペースで進んで行くことなど現実的ではないでしょう。だからこそ、誰かが立ち止まった時には、そのことに気がついてあげられる……、自分が苦しい時には素直にサインを表に出すことが出来る……、そんな距離感を自然と築いてゆける家にしたいと考えています。

今回の一件で当面は車イスでの生活を余儀なくされた彼ですが、ご家族も含め、退院後は再びメビウスへ戻ることを希望しています。受け入れにつきましても設備面、サポート態勢など、これから整えなければならない課題もありますが、今後も彼と共に進んでゆけることを第一に考えてまいります。

入寮者、入退院も多く慌ただしい夏に……。

メビウス動静報告

６月

前述のとおり、寮生のひとりが投身自殺を図る事件が発生してしまいました。

また、昨年 12 月末から行方が分からなくなっていたＭさんが再度の入寮を希望し来所、その後、再入院（下総精神医療センター）となりました。その他、寮生の中でも一番在籍期間の長いメンバーK さんが逮捕され、その対応に追われることに。思いがけない事件が発生し、課題も多く残る月となってしまいました。

７月

新規での入寮者も多く、またそれぞれに新しいメンバーの目的意識にも違いが見られ、スタッフは新生活への調整に苦労したようです。既存の寮生も含め、自分が積極的に参加する活動、したくない活動が顕著に現れはじめ、メンバー間にも生活意識の温度差が見てとれるようになってきました。新規入寮者のなかには意見が合わず、残念ながら翌日に退寮してしまった者もありました。反面、在籍期間の長いメンバーのひとりＮさんが就職活動への意欲を新たに単独での生活をはじめる嬉しい出来事もありました。

８月

この月は新たな入寮や入退院もなく、かわりに裁判を抱えるメンバーの日程が集中した月でもありました。司法手続きや裁判に関しては施設側のサポートも及ばないことが多く、皆それぞれの事情によって情緒の浮き沈みが見てとれました。先月から引き続き、参加意欲の低い活動への誘導に苦労し、マイベジタブルでの作業に人員が不足する事態が続いてしまいました。また６月に自殺未遂事件を起こしたＭさんの容態が順調に回復し、リハビリを目的とした病院へ転院するといった明るい知らせもありました。

９月

月のはじめより複数の寮生に薬物使用の疑いが持ちあがり、再入院となる事件が発生してしまいました。そのひとりＹさんは薬物摂取を起因とする精神疾患と長く懸命に向き合ってきた姿を見せていただけに、他の寮生にも動揺が広がりました。一方で、就労継続支援事業のプロジェクトに職員として川口さんが新たに加わり、今月からマイベジタブルの作業を中心に、事業スタートへ向けての準備作業を加速させています。

※　９月末日時点での在籍者

男性　18 名　　女性　８名　　（うち入院者８名を含む）　　在籍総数　26 名

メビウスの治療継続支援プログラムとは？

クレプト・マニア治療支援編

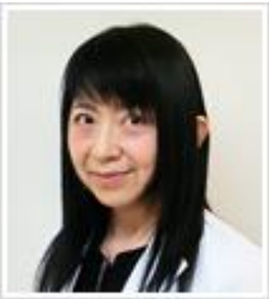
メビウスでは基本的に下総精神医療センターでの条件反射制御法を標準治療として、プログラムの中心に定めております。入院集中治療を受療した後、医師により本格的な社会復帰の前にリハビリ期間を設けることが必要だと判断された者、また、以前の問題行動が原因で生活の基盤を失ってしまった者たちを受け入れ、治療の継続を第一としたグループでの生活を提供しております。

最近では入寮者たちの症状や病態も多様化し、それぞれの対象に合わせた、それぞれの治療継続支援が求

められています。その中でも今回は「病的窃盗症」、いわゆるクレプトマニアに対する維持サポートについて具体的にどのような作業、及びそのサポートを行っているのかにふれたいと思います。

まず基本的なサポートとして「おまじない」と呼ばれるキーワード・アクションと、イメージの中にて窃盗（主に万引き行為）を繰り返していた頃の行動を詳細に思い返す「想像作業」の確実な実施を促しながら、その回数を回数表によって毎日管理します。その上で本人は「疑似作業」と呼ばれる、実際に窃盗を行う動作を疑似的に毎日決められた回数行うのですが、これは実店舗のコンビニやスーパーにて実施します。店舗に入り、商品棚の間を歩き、商品を手に取って、そのまま元の場所へ戻す。ただこれだけの作業ですが、その間に自身の欲求の度合いやおまじないの効果などを観察、確認することができます。また、欲求が高まってしまい、おまじないの効力を上回るような場合にはスタッフが店舗まで付き添い、その監視のもとに作業が行えるようサポート態勢を整えています。他にクレプトマニアの傾向として摂食障害をあわせ持つ対象者も多く、今後も医師との連携のもと、効果的なサポートを考えてゆきます。最近では裁判においてもこれら治療継続への取り組みが認められ、社会での治療を第一とした執行猶予を受けるケースも実際に出てきました。

高岡医師によるサイコセラピーをはじめました。



メビウスでは入寮者を対象としたカウンセリング活動の一環として、高岡美智子医師（メディカルパレット代表）によるサイコセラピーを７月から導入させて頂き、メビウス寮内に設けたセッションルームにて順次実施しております。

サイコセラピー(psychotherapy)。一般にはあまり聞き覚えのない言葉ですが、「心理カウンセリング」や「心療内科」といった言葉は近年よく耳にするようになりました。サイコセラピーとはそういった心理療法を広く総括して呼ぶ言葉であって、その中でも医師やカウンセラー、セラピスト等々がそれぞれに用いる理論や技法によって様々な呼び方がされているようです。

それでは実際に高岡先生とのセッションではどのようなカウンセリングが行われるのでしょうか。

日常生活で直面する悩みや不安の大部分は自分を取りまく外部との環境、とりわけ対人関係に起因していることがほとんどです。ところが大多数の私たちはその外部とのコミュニケーションについて、何の根拠もないただの経験則だったり、こうなって欲しいという願望から自分なりのパターンに基づいて行動を決めてゆきます。その結果、自分が望まぬ方向に関係が進みはじめたとしても自分ではどうすることも出来ずに摩擦を抱えることとなるのです。これが私たちが自覚する「悩み」であったり、「憤り」や「生きづらさ」の正体というわけです。しかし考えてみれば、私たちはこういった対外者とのコミュニケーション技術について、専門的なレクチャーなど受けたことはありません。前述のとおり皆それぞれが正解の解らぬまま、場当たり的に対処してきているに過ぎないのです。高岡先生はこのコミュニケーションのとりかたについて多くの人が間違った知識や誤解をもとに結論づけてしまっていると言います。心理学の研究も進んだ現代においては、こういった摩擦を極力生じさせず、ずっと効率の良いコミュニケーションの取り方が確立されているのだと教えてくれました。同時に、それらの技術を自ら用いて自分で対処してゆけるようになることが重要だと強調します。特にメビウスのような社会復帰に向けたリハビリ段階にある者や家族には、これからの新しい環境へ対応してゆくための心強いツールとなってくれるはずです。

もちろん先生は我々メビウスの寮生が標準的に受療している条件反射制御法にも理解が深く、今後も長く治療を続けてゆくにあたってのメンテナンスにも注力してくださるとのお話しでした。

これからもこの紙面を借りて高岡先生との具体的なセッション例やキーワードの解説を順次紹介してゆきたいと考えております。

「デコパージュ」が新しい活動に！

メビウスの新しい取り組みとしてデコパージュ作品の製作をはじめました。

デコパージュとは薄紙に描いた絵や模様を様々な用品に写し取ってデコレーションする工芸のことを呼びます。巷では最近、ママたちが子供の味気ない上履きにこの手法を使って様々なデコレーションを施し、「デコ上履き」や「盛り上履き」と呼んで履かせるブームがＳＮＳを中心に沸き起こったことで話題にもなりました。デザインを自分で描くことが苦手な人でも、既製品の紙ナプキンなどに施された絵柄を好きに選んで写し取り、手軽にかわいい作品が作れることが人気の要因となっています。メビウスではこれまで独学で様々なメディアから技術を習得してこられた井上利江さんを先生として迎え、作品の販売を目指した本格的な製作活動をはじめました。もちろんメビウスの寮生たちによる社会参加活動のひとつとして定着を目指すものです。

その第一弾として石鹸にデザインを張り付ける「デコソープ」の製作にとりくみ、中には寮生たちがオリジナルで描き起こした絵やデザインを写し取ったものも多く、皆それぞれの役割をもって楽しく作業にあたっているようです。今後は作品の展示方法や販売ルートの開拓、バザーへの出品など、順次計画を形にしてゆく必要がありますが、そんな私たちの活動に理解を示してくださいましたバレーボールの実業団チーム「CHIBA ZELVA」(千葉ゼルバ) 様より、ノベルティーグッズとしての試作品製作を請け負うことにもなり、順調なすべり出しを見せております。ご関係者の方々のご協力に、改めて感謝申し上げます。

近日中に会員の皆さまにも私たちの作品を紹介できるよう、鋭意考案中でございます。　準備が整い次第、この紙面においてもお知らせを行っていくとともに、今後の展開に是非ともご注目ください。

パクチー選別作業 ＆ 就労継続支援事業所の開設へ向けて。

現在、メビウスが当施設の基本活動として行っているパクチーの選別作業を、行政が認可指定する福祉サービス事業へと発展させようという趣旨から就労継続支援Ｂ型作業所プロジェクトは始まりました。

具体的には私たちが自前の作業所を開設し、行政が定める要件を満たした上でメビウス以外からも広く利用者を募集する「事業所」として認可事業に参入することを目的としています。こうすることで当寮生を含む利用者たちは行政の就労継続支援サービスを公式に受けることとなり、事業所としてはそのサービスの提供料を受けられる形となります。メビウスとしても貴重な事業収入のひとつとなることを期待しながら今年中の認可を目指し、準備作業を急いでいるところです。今後もその進捗についてはこちらの紙面にて随時ご報告させていただきます。

さて、それでは最近の作業についてのご報告です。

夏季を通した印象としましては、猛暑による生育不良から品質のバラつきに悩ませられた季節だったと思い返します。入荷したパクチーの品質が芳しくない日には作業も午後をまたぎ、出荷時間にもギリギリ間に合わせるようなことも珍しくありませんでした。当然、作業を行っている寮生にも負担は多くなり、そのことが原因となって参加したがらない者も少なからず出てきてしまいました。そのため８、９月は請け負うパクチーの量を調整しながら作業を継続するなど、引率側の苦労が多かったようです。本来、全員参加としている作業なだけに、参加人数の減少は作業時間の延長に直結してしまうこととなり、毎回休まず積極的に参加して頑張っている者に負担が集中してしまうこととなります。

これらの課題は先に紹介した事業所プロジェクトにも持ち越され、効果的な対策を考えていかなければなりません。